

## 『ごもくめし』と留学生

*Gomokumeshi* and exchange students伊藤 みちる<sup>1</sup><sup>1</sup>大妻女子大学国際センターMichiru Ito<sup>1</sup><sup>1</sup>International Center, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：『ごもくめし』、大妻、良妻賢母、留学生

Key words : *Gomokumeshi*, Otsuma, "Good wives and wise mothers", Exchange students

## 抄録

大妻学院を創立した大妻コタカ先生が執筆した自叙伝『ごもくめし』は、「良妻賢母の大妻」という世評を培ってきた学院の女子教育の基本理念やその歴史が詳細に記されている。これまで『ごもくめし』は学院傘下の中学・高等学校の生徒や、大学・大学院の学生、保護者や教職員に読まれてきたものであり、外国人による講読や感想の報告はない。本稿は2016年度後期に大妻女子大学国際センターに所属していた10名の中国と韓国の留学生が、『ごもくめし』の講読を通じ、①どのような感想を抱いたか、②来日前から抱いていた日本女性に対する否定的なイメージや偏見がどのような変化を遂げたのかについて記録した。さらに『ごもくめし』講読によって大妻女子大学への留学に特別な意義を見出すことができたのかについて示した。日本女性は結婚後、家庭に閉じこもるしかない可哀想な存在という留学生の偏見は、『ごもくめし』に記された結婚後の女性の社会進出を支持するコタカ先生の考えにより和らいだ。そして結婚して家庭を築いてから職業婦人となったコタカ先生に敬慕を抱くと同時に、様々な困難を乗り越えて一人の日本人女性が創立した大妻女子大学に留学したことに好意的で特別な意味を見出していた。

## 1. はじめに

明治41(1908)年に私塾として開設された大妻学院は、平成29(2018)年に創立110周年を迎える。昭和36年に学祖大妻コタカ先生が自身の喜寿の記念に執筆した『ごもくめし』は、大妻学院の中学・高等学校、大学・大学院の生徒や学生、教職員や保護者に広く読まれてきた。『ごもくめし』には、大妻コタカ先生の一人の女性としての一生や大妻学院における女子教育の基本理念、また広く社会において「良妻賢母の大妻」という世評を培ってきた学院の歴史が詳細に記載されている。

大妻コタカ先生が自叙伝『ごもくめし』の中で説いた「良妻賢母」教育は、グローバル社会に柔軟性を持って多様な生き方が求められる21世紀の現代においても、「良き妻」「良き母」「良き社会人たれ」という大妻学院伝統の理念として受継がれている。しかし現代の大妻女子大学において「良妻賢母」が意味することや、現代における一

般社会の「良妻賢母」に対する期待やイメージは世代や性別によって異なり、必ずしも一致しない。なぜなら、家庭を切り盛りする妻であったり母であったりする女性に対する個人や社会の期待や現実様々は様々で、「良妻賢母」という言葉は常に主観的で流動的な、また時には政治的な解釈をされてきたからである。

日本・中国・韓国の良妻賢母論を研究する陳(2006)<sup>[1]</sup>によると、一般的に儒教の伝統的な古めかしい女性像として理解される「良妻賢母」であるが、実は19世紀から20世紀初めにかけて、東アジアが近代女子教育を唱え始めたころに起こった、西欧の近代女性をモデルとする、近代の人権思想や近代ナショナリズムから生まれたものだという。日本語の「良妻賢母」という言葉を生み出したのは、イギリス留学中に母親から子どもへの教育の重要性を目の当たりにした明治の啓蒙思想家の中村正直であると考えられている<sup>[2]</sup>。この「良妻賢母」

像は、中国語では「賢妻良母」、韓国語では「賢母良母」として、日本から広がっていった<sup>13)</sup>嫁として子どもを産む役割を強調する儒教に対し、「良妻賢母」は夫に対する内助と子に対する教育を重視していた。つまり女性には、近代国家を築くための基礎となる強い国民を育てることが期待されていた。さらに女子教育者の下田歌子が、女性の労働力としての社会進出を含んだ「良妻賢母」を説いた<sup>14)</sup>のに対し、漢学者の服部宇之吉は男女の別を重視し、独立自活する女性を否定した<sup>15)</sup>。このように日本の社会には様々な「良妻賢母」像が存在してきた。

現在では、日本女性が生涯にわたり様々な選択肢を自由に選び、人生を謳歌することが一般的になり、妻や母にならない選択をする女性や、妻や母になっても職業を持ち働き続ける女性なども増えてきている。しかし伝統的な日本女性像、つまり年ごろになると結婚し、勤め先を辞め、子どもを産んで育てることに専念すると同時に、夫と義両親に尽くす姿<sup>16)</sup>は、近隣の韓国・中国をはじめとする世界各地において映画やドラマ、またアニメなど様々な媒体を通じて、広く知られており、そのイメージはいまだ健在という現状がある<sup>17)</sup>。

## 2. 目的

2013年に設立された大妻女子大学国際センターには、2016年度までに28名の諸外国からの学生が所属し、日本語と日本事情を学んできた。本稿では、2016年度一年間留学した韓国の女子大学生4名と、2016年度後期のみ留学した中国の女子大学生6名が、『ごもくめし』を読んで、どのような感想を持ったのかを報告する。来日前に母国でどのような日本女性に対するイメージを培ってきたのか、さらにはそのイメージが先入観となり日本女性へ偏見を抱いたまま『ごもくめし』を講読した場合、どのような反応を示し、講読後にどのような感想を持ったのかについて記録した。さらに『ごもくめし』講読を通じて、大妻女子大学への留学に特別な価値を見出すことができたのか明示する。

## 3. 方法

### 3.1. 方法

大妻女子大学国際センターは教育プログラムにおける2016年度後期選択科目の一つとして「日本文学（近・現代）」を開講した。留学生はその授業

のなかで自叙伝・随筆の作品として『ごもくめし』を講読した。報告者は留学生に対し、講読前に一般的な日本人女性に対するイメージの聞き取りを行い、講読中の留学生の反応を記録し、講読後に1200字以上の感想文を提出させた。

### 3.2. 留学生について

2016年度は、アメリカから1名の日本語初級の留学生が前期半年間、韓国から4名の留学生が1年間と、中国から6名の留学生が後期半年間、大妻女子大学国際センターに所属し、国際センターが開講する留学生対象の教育プログラムである日本語と日本事情の授業を受講した。2016年度の韓国・中国合わせて10名の留学生の日本語能力は中上級から上級であり、留学を終える頃には6名が日本語能力試験N1を取得していた。これは日本語技能に得手不得手な分野があるなど個人差が大きいものの、漢字2000字、語彙10000語を持っているとされるレベルである。具体的には、新聞の社説や批評の読解、ニュースや講義の聴解もでき、自然なスピードで話せるなど、幅広い場面で自然に日本語を使うことができるレベルである。この10名の留学生のうち6名は、留学前に母国で既に芥川龍之介や太宰治の原作を日本語で読んだ経験を持っていた。よって留学前から既に上級レベルの日本語読解能力を持っていた。さらに留学生たちは授業で紹介した夏目漱石や川端康成の作品を自発的に大学図書館で読み始めるなど、非常に高い向上心を持っていた。そのため報告者は、現代ではあまり用いられない語彙や漢字の送り仮名などに留学生たちが戸惑うことは予想しながらも、留学生たちは『ごもくめし』を講読するに足る日本語読解能力を有していると判断した。

### 3.3. 『ごもくめし』講読

1回90分の講義のうち約半分の45分を用い、6回を行った。1回目は報告者が段落ごとにゆっくり音読し、一段落ごとに漢字や語彙の意味を確認した後に内容理解の確認を行い、その後社会文化背景の説明を行った。そして『ごもくめし』の数章を指定し、読みやすくなるよう句読点を追加し、その指定された数章を次回の授業までに読んでくることが予習として課した。2回目以降の授業では課題部分を報告者や留学生たちが音読し、語彙や内容の確認を行ったのちに、社会情勢や日本文化について説明を行い、内容理解の確認や議論を行

った。

#### 4. 結果・考察

##### 4.1. 中国・韓国の女子留学生が持つ日本女性に対するイメージ

『ごもくめし』の講読を始める前に大妻女子大学国際センターに所属する韓国・中国の女子留学生に対し、日本女性に対するイメージの聞き取りを行った。留学生の発言のまま、まとめたところ、以下のものであった。

表 1. 中国・韓国留学生の日本女性のイメージ

中国・韓国留学生の日本女性のイメージ
従順
優雅
我慢する
我慢しないといけない
我慢強い
支える係
かわいそう
つまらない
専業主婦
男性の次
夫の後ろ
人生がもったいない
結婚したら奴隷
あまり勉強をしない
みんなで行動する
子どもを産まない
社会的地位が低い
結婚したら社会で働けない
結婚したら苗字を変えないといけない
日・中・韓の3国で最も女性の地位が低い

このように聞き取りを行った韓国・中国留学生にとっては、日本女性は憧れや羨望を抱く対象では決してなく、ある一人の留学生が「日本人じゃなくてよかったです」と述べるに至るほど、日本女性に対するイメージは非常に悲観的で否定的なものだった。日本女性に対する肯定的なイメージについて限定して聞いたところ、一人から「いつも化粧をしていて、いつも綺麗にしている」との発言があり、おおよそ全ての留学生がこの意見に同意していた。

この質問を行ったのは、韓国留学生が来日して8ヶ月目、中国留学生が来日して3ヶ月目であったが、報告者は留学生たちが日本女性に対してここまで強く偏った悲観的なイメージを持っていることに驚いた。留学を開始してからこのようなイメ

ージを抱くようになった特別な出来事があったのか聞いてみると、特になどと言い、何人かの留学生は留学開始前から日本女性はこういうものだと思っていたと発言していた。

##### 4.2. 『ごもくめし』講読中の留学生の反応

大妻コタカ先生による自叙伝であり、大妻学院の歴史についても詳細に記されている『ごもくめし』であるが、この講読に際して留学生より「一文が長く、固有名詞が多くて難しい」という感想を得た。これは報告者の予想通りではあった。他方、外国語として日本語を学ぶ現代の日本語学習者が、日本語能力上級になっても触れる機会があまりなく難しいと感じるであろうと予想していた「寄宿舎」(p. 25)、「筋向い」(p. 36)、「拝領する」(p. 44)、「元気百倍する」(p. 73)、「総ざらい」(p. 78)、などの語彙に関しては、「全部辞書で調べるから大丈夫」と、現代標準日本語ではあまり用いられないにも関わらず、特別な難しさを感じることはなかったようである。

『ごもくめし』購読中に、感情表現が比較的豊かな留学生たちから特に活発な反応が得られたのは以下の5章であった。

###### (1) 「私の結婚」(pp. 22-31)

大妻コタカ先生の夫となった大妻良馬先生との出会いと結婚に関する記述であるが、報告者が音読をしている最中、二人の留学生が泣き出した。理由は、「知らない人と無理やり結婚しなくてはいけなくてかわいそう」、「残酷である」とのことであった。『ごもくめし』の中のコタカ先生に泣き出すまで感情移入をする留学生がいたことは報告者の予想を超えていた。多くの留学生は、「コタカ先生に初めて会った大妻良馬とその日のうちに結婚を強制した従兄は信じられないほど狡賢く」、「突然結婚させられたショックから抜け出せていないコタカ先生を気遣うことなく自分のペースで歩き続けた大妻良馬先生は最低だ」と怒りを表していた。その後、留学生たちの大妻良馬先生に対する評価は、『ごもくめし』の講読が終わっても上がることはなかった。

###### (2) 「焦土から立ち上がる」(pp. 50-59)

大正12年9月1日に起きた関東大震災による大妻の被災状況と学校再建への取り組みに関する記述である。一部の留学生によると、東京にある

大妻女子大学への留学は、福島原子力発電所事故など東日本大震災の後遺症がまだ強く残っているとの理由で、家族から必ずしも簡単には賛成を得られなかったそうである。それは日本と韓国・中国との間の歴史的な政治問題に端を発する感情的な意見とは異なり、東日本大震災の影響についての報道は、日本と韓国・中国では内容に違いがあり、東京の現状に対する不安から、東日本の東京に住むことになる留学に対して家族の否定的な意見が根強かったという。

そのためか留学生たちは地震に対して非常に敏感で、留学期間中に何度か地震を体験した留学生たちにとって、現在自らが通学する大学も過去には実際に地震被害に遭ったことがあるという関東大震災の被災に関する記述は特に印象的だったようだ。報告者が音読している間、留学生たちは息をつめて聞き入っていた。特に生徒に死者が出たという記述がショックだったようで、地震に遭ったときにどう行動すべきかを確認した。私学であるため自治体からの物資配給が受けられず、日用品や飲食物の入手が困難だった記述にも不安を覚えたようで、現在は学内にある程度の震災備蓄品があるため『ごもくめし』の中の記述のようにはないことについて説明を行い安心させた。留学生たちは、校舎が焼け落ちても、大妻コタカ先生は泣き続けたり諦めたりせずに、復興のために意識を切り替えたその早さについて、「さすが日本である」との感想を述べていた。

### (3) 「思いがけない夫の死」(pp. 60-63)

夫である大妻良馬先生が体調を崩し亡くなるまでの4日間と、亡くなって文部省からの学校法人の認可が下りて葬儀を行うまでの8日間の記述である。留学生たちは、夫が亡くなっても、悲しみを見せずに学校のために働き続けた大妻コタカ先生の姿に感銘を受けていた。しかし一部の留学生は、コタカ先生の文章から悲しみが全く感じられないと疑問を抱いたようで、『ごもくめし』を執筆したときには、コタカ先生も喜寿を迎えており、既に夫の死は思い出になっていたからではないか」との考えを述べていた。

### (4) 「よい妻に」(pp. 162-163)

『ごもくめし』を扱った6回の授業のうち最も紛糾したのが「よい妻に」を講じた日である。これは大妻コタカ先生が北海道で行った講演の概要

を紙面にまとめたもので、結婚後は家庭第一主義のもと職業を持つことは第二義的に考え、まずは「よい妻」であることを心がけるべきとの内容である。紛糾した原因は正しい内容理解がされていなかったからである。

つまり上記4.1.に示した日本女性に対する留学生の偏ったイメージが内容理解を妨げたようで、『ごもくめし』の記述の内容を理解しないままに、「結婚したら仕事をするなど言っている」、「仕事を辞めることが必要だったら結婚はしません」などの意見を発言していた。つまり大妻コタカ先生が「よい妻」で、留学生たちがもともと持っていた必ずしも自らは賛同できない日本女性のイメージを肯定し、それを推進していると誤解してしまっただけである。その後、間違った内容認識を正し、詳しく内容を確認すると共感しない留学生はいなくなった。このことについて以下に詳述する。

大妻女子大学国際センターに所属する留学生たちはある程度経済的に豊かな家庭出身者が少なくなかった。しかし今回の大妻女子大学への留学で初めて親元を離れ、限られたお小遣いをもとに生活をやりくりする体験は初めてだったようだ。そのため母国の家族や、将来の夢、自身の人生やお金を稼ぐことについて深く考える機会を多く持ったようである。日本よりも職業を持たない専業主婦の割合が少ない韓国・中国からの留学生からしてみると、結婚を機に仕事を辞める、また社会で働くことを諦めなければならないという伝統的な日本女性の行動には共感できないようだった。しかし「よい妻に」で書かれている「家庭は夫婦二人の共同の場」で、問題や不平がない円満な家庭を築くことができこそ、よい主婦でよい母でいることができ、それから個人の能力に応じた社会進出をするべきであるという大妻コタカ先生の考えを、留学生の日本語理解の間違いに注意しながら丁寧に解説すると、すべての留学生が満足そうに共感していた。

### (5) 「外地の思い出」(pp. 170-193)

この章には、大妻コタカ先生が昭和8年に日本統治下のソウル、満州、台湾、また翌9年に樺太を訪問した旅の記録が書かれている。留学生は、日本の植民地だった自国をコタカ先生が訪問していたことに驚くと共に、植民地や現地の人々を見下したりせずに偏見なしに訪問を楽しんでいる様子

を読み取り、「楽しそうで嬉しい」と発言していた。また大妻コタカ先生の視点から描写されている当時の自国の様子を興味深そうに読み進めていた。

このような先入観・イメージを持った中国・韓国留学生が『ごもくめし』を講読し、大妻コタカ先生という一人の日本人女性の一生を知るようになったところ、次のような感想を挙げた。

表2. 『ごもくめし』講読後の感想（複数回答）

『ごもくめし』講読後の感想	10人中(人)
大妻の歴史がわかった	10
日本の歴史がわかった	10
漢字が難しかった	10
構文が難しかった	10
難しかった	10
読んでよかった	9
感動した	8
大妻コタカ先生に会いたかった	8
楽しかった	7
つまらなかった	1
できるなら読みたくなかった	1

『ごもくめし』を「つまらなかった」「できるなら読みたくなかった」と答えた留学生は同一人物であることから、大部分の留学生は難しいと感じながらも『ごもくめし』の講読に好意的であることがわかる。明治時代から昭和30年代までの日本の歴史を大妻学院と大妻コタカ先生の生涯を通じて知ることができる『ごもくめし』は大妻女子大学の留学生たちに特に価値ある教材として用いることができる。

さらに、長さに制限を設けずに課題として留学生たちが自由に書いた『ごもくめし』の読書感想文の一部を、留学生が書いたまま以下のように引用する。なお報告者は助詞や文法の間違ひは修正しておらず、また提出された感想文の平均的な字数は1200字ほどであった。

「そのように強く、自分の考えのある女性は、私たちすべての人の手本です。これから、私もコタカ先生の精神を学び、よりよい自分になるという目標に向かって、よりよい人生を追求します！」

「一番感心したのはコタカ先生の『良妻賢母』精神です。コタカ先生はどんな時代でも、『よき妻、よき母たれ』のほかに、『よき社会人た

れ』も若い女性の原則だと思いました。つまり、上手な家事・洗濯・料理だけを身につけるのはたりなくて、よい社会人になるも重要です。難しくてできないと思います。現代の社会では、女性たちは、仕事が忙しいし、負担も重いし、すごく大変です。だから私も円満な家庭を作るために、夫も参加しなければならないと想います。」

「日本の女性は家父長的な夫に順応して暮らす傾向が強いと思った。学校では先生で、家庭では夫の妻で、子どもの母であることが大変だと思った。」

「夫が急に亡くなっても、学校経営に情熱を注いだ。彼女はとてもタフな女性だと思う。両親の死も夫の死も彼女に打撃を与えていなかった。かえって彼女に自分の人生の支配者になった。近代日本の女性の代表だ。」

「コタカ先生はすごく運が良い人だと思いました。女の子で学校を通ったことも、強制結婚だったけれども良い夫と出会ったことも、運が良い人だと思いました。しかし『ごもくめし』を読んだあと、その思いは変わりました。たしかに運もあったかもしれませんが、それを取って機会に変えた人はコタカ先生でした。」

「私はこの本の中でよい妻に関する部分が印象に深かったです。その本には『家庭第一でありたいと私は希望しております』と書かれています。コタカは自分のキャリアも重要だが、まず、家庭が一番重要だと強調しています。私は最初には、今の時代には女性は妻になる前、一つの格体として自分にもっと集中しなければならないと思いました。でも、今思えば、家庭が円満でなければ、自分にも不幸になります。もちろん自分の才能を表現することも重要ですが、それより、良い妻になって家庭を幸せにすることが大切です。コタカのとおり家庭を円満にしてから、自分の能力を表出すればよいからです。」

「日本に初めて来た当時には、日本の女性といえば、従順で優雅なイメージを思い出した私だったから、このように大学を明治時代に女性が設立したという事実だけでも驚きました。『ごもくめし』は私の偏見を消してく

れました。『ごもくめし』の中で、コタカという女性は良い妻で、先生で、多くの人に夢と希望を見せてくれた人でした。彼女は女性である前に多才多能な人で、その才能を人生を終える以前まで展開した偉人でした。結婚した後も、自分の本能と教えに対する情熱を隠しておらず、夫との呼吸を通じて広く育てていきました。関東大震災で学校が燃えてしまった状況でも、さらには夫を失った状況でもコタカさんは理性をめぐっておらず、むしろ冷静に問題を解決していきました。」

「私が一番感心したのはコタカ先生の『良妻賢母』精神です。コタカ先生は、どんな時代でも『よき妻、母たれ』のほかに、『よき社会人たれ』も若い女性の原則だといいました。つまり、上手に家事・洗濯・料理だけを身につけるだけでは足りなくて、よい社会人になることも重要です。私は難しくできないと思います。」

「特に感銘深かった部分は彼女の家庭に対する思想でした。家は男女が平等な立場で成し遂げていかなければならない空間であり、こうして円満な家庭を作ってから、それぞれの能力に応じて各方面への進出ができることでした。私も普段に家庭で作られる人格を重視しなければならないという思想を持っていたために、コタカさんの意見に全的に同意しました。またコタカさんは子孫らに女性の力を見せてくれ、日本で女性の人権が向上されることができた教育という重要な部分の責任を負った立派な人物でした。私も彼女のように未来を明らかにしてくれることに貢献したいです。」

日本女性は結婚をしたら子どもを産み専業主婦にならなければいけないかわいそうな存在という偏見に基づいて『ごもくめし』を読み進めていた留学生たちであるが、じきに大妻コタカ先生が説く家庭の大切さとそのための女性の役割について理解し始めると、共感を示していた。大妻コタカ先生は結婚をし、一時は職を辞したが教育への情熱を実現し、夫である大妻良馬先生の協力を得て、近所の子どもに手芸を教えていたような私塾を、現在のような大学院まで有する大妻学院を築き上げた。大妻コタカという一人の女性の一生が書かれた『ごもくめし』であるが、結婚して温かい家

庭を築くと同時に自己実現を果たしたコタカ先生の姿に、すべての日本女性が必ずしもかわいそうなおわけではなく、円満な家庭を築くことは、職業を持ち社会進出する女性にとって非常に重要な意味を持つことを、留学生たちはコタカ先生の事例を通じ学んでいた。

#### 4.3. 大妻女子大学へ留学してよかったか

##### (1) 大妻女子大学に留学した理由

日本の多くの大学・女子大学は国際化を図るため、また少子化対策のため、留学生の受け入れ事業に力を入れている。大妻女子大学も2013年に国際センターを設立し、2016年度までに累計28名の留学生の受け入れを行った。そのうち2016年度に大妻女子大学に留学していた中国・韓国の女子大学生10名に、『ごもくめし』講読前に聞き取りを行ったところ、数ある日本の大学の中から本学を留学先に選んだ理由は以下のとおりであった。

表3. 大妻女子大学を留学先に選んだ理由

大妻女子大学を留学先に選んだ理由	10人中(人)
日本の首都である東京にあるから	10
東京の中心にあるので繁華街に遊びに行きやすい	10
東京の中心にあるのでアルバイトを見つけやすい	10
東京の中心にあるのでアルバイトの時給が高い	10
歴史がある	10
日本文化を体験できる美術館や劇場などが近い	10
東京が好き	10
母国で通う大学の提携校だった	10
母国で通う大学の先生に勧められた	9
日本留学先として他の選択肢がなかった	6
大妻女子大学の留学経験者からのお勧め	3
留学中に履修できる科目が魅力的だった	5
日本の友人が東京に住んでいる	2
女子大だから	1
大妻女子大学の教育理念に共感した	0

このように、すべての留学生にとって大妻女子大学の利便性が留学先としての魅力であることがわかる。好条件のアルバイトを見つけやすい立地であることを留学生たちが言及したが、実際にアルバイトを行っていたのは10名の留学生のうち6名のみである。アルバイトをしなかった留学生たちは、授業と日本語学習が忙しく、限られた日本滞在期間に働くことに時間を費やしたくないからだとして挙げていた。アルバイトをした留学生たちは、「大学以外の場所で色々な日本人と知り合って、せっかく学んでいる日本語を実践しながら遊ぶためのお小遣いを稼ぎたい」といった

理由を挙げていた。

現在、日本へ就学ビザで渡航し、語学学校や大学などに籍を置きながら就労がメインの生活をしている留学生が増えているとの報道もある。しかし今のところ大妻女子大学国際センターの留学生のうち、アルバイトに精を出しすぎて、本業である日本語学習がおろそかになってしまった者は一人もいない。アルバイトをすることで、大学という狭い世界から広い日本社会に出ることができ、日本の文化を実体験しながらさまざまな場面で多種多様な日本人に出会い、変化に富んだ日本語に接することができるため、アルバイトは日本語学習の面からも有益な面があることは確かである。大妻女子大学国際センターに所属する留学生たちはアルバイトを通じて多くのことを学び、観劇や小旅行に出かける資金を稼ぐことができたため、より積極的に視野を広げる経験を積むことができたようである。さらにアルバイトと日本語学習の時間をやりくりするため、自己管理ができるようになり、より計画的に集中して日本語学習を行っていたようであった。大妻女子大学に留学する前に培っていた日本語学習能力の個人差はあるが、日本語能力試験 N1 に合格した 6 名のうち 5 名はアルバイトを行っていた。すべての留学生たちに無条件にアルバイトを勧めることはできないが、適切で適度なアルバイト経験が留学生に与える効果は有益なものである。

韓国・中国の提携校から大妻女子大学国際センターへの留学生の受け入れは、2016 年度後期の時点で既に 3 年続けられている。母国に戻った本学留学経験者や母国で通う大学の先生からの情報を元に大妻女子大学を留学先として選択したことは、日本語・日本事情の授業が高く評価され、国際センターの職員が日常より提携大学と良好な関係を築いてきた証である。とはいえ留学前に大妻女子大学の教育理念について知っていた留学生が一人も存在しなかったことは残念である。

## (2) 『ごもくめし』 講読後の留学生の大妻女子大学留学への意味づけ

大妻女子大学国際センターに所属する留学生たちは、大妻女子大学の立地の利便性を日本の留学先として選択した理由として挙げている。上記のように本学の教育理念には留学前と同じく無関心なまま、利便性がもたらす恩恵のみに満足して留学生生活を終えてしまうのは、つくづく惜しいと感

じる。そこで『ごもくめし』を講読することで、大妻女子大学に留学したことによどのような意義を見出すことができたのか、留学生たちの感想文から抜粋し引用する。留学生たちが書いた文章のとおり、言い回しや語彙の選択などは提出されたままにしてある。そのため日本語が不自然な点が散見されるが、それも含めて留学生たちの実力として報告する。

「大妻コタカ先生は非常に勇気があって力も持っている人だと思う。なぜかというところ、この世界の主導権はいつも男性が持っているもので、大妻コタカ先生は女性一人で、大妻の学校を創立した。私も大妻コタカ先生のようにになりたい。自分自身で、力があって、自信があって、どんなことにあっても対応できるようにになりたい。この本を読んでから大妻女子大学に対して理解が深くなった。大妻女子大学で留学してよかった。」

「大妻女子大学の留学生として、この本を読む必要があると私はおもう。この本を読んでから、大妻女子大学に対して、理解がもっと深くなった。学校の歴史、物語もわかるようになった。」

「今回コタカ先生の『ごもくめし』を通じて大妻女子大学について分かることができました。それからこの学校にどんな熱情と愛情があったかもわかりました。コタカ先生の全部がある大妻女子大学で勉強してよかったと思っています。」

「大妻女子大学は良妻賢母を育成する学校で有名です。そしてこの本を読んだら、もっと良い女になることができるか知りたかったです。頑張るってなれると思います。またこの本を通じてコタカが自身の仕事に対する考えと学生たちを眺める暖かい心も感じることができました。」

「教育は人間、国家、世界の文明に関しては非常に重要な位置を占めている。教育のおかげで科技が発展している。人間の生活も豊かになっている。大妻コタカは自分も女子として、自分の生涯にわたり女子教育に尽くした。困難を乗り越え、一生学校経営に情熱を注いだのは感心した。」

『ごもくめし』の中でコタカという女性は良い妻で、良い先生で多くの人に夢と希望を見せてくれた人でした。彼女は女性である前に多才多能な人で、その才能を人生を終える直前まで展開した偉人でした。私の日本の女性の偏見も消してくれました。女性の力はすごいです。」

「私は『ごもくめし』を読んで、女性の役割について考えてみるきっかけになりました。女性はもしかしたら男性よりするべきことが多いです。しかし女性はすることができる能力を持っていると思います。そしてコタカが住んだ時代に女性が職業を持つというのがありふれていないですけれど、大学を設立したのが尊敬しました。そのような努力のコタカが設立した良い女子大に留学したことは重要でした。私も後で結婚したら和やかな家庭で自分の仕事をうまくしたいと決心しました。」

『ごもくめし』について感想文を書きながら、私は大妻女子大学に交換留学してきた留学生生活を完了する感じを受けました。最初に大妻という大学に接するようになったとき、私は大妻がどのような大学かも知りませんでした。大妻コタカ先生のがんばりがたくさんの大妻女子大学に留学したことは私のためになりました。」

2016年度後期に大妻女子大学国際センターに在籍した留学生10名のうち9名が読んでよかったと感想を述べた『ごもくめし』は、留学生たちに大妻女子大学に対する好意的な印象を与えることに成功したようである。さらには大妻女子大学の利便性だけでなく、大妻学院の歴史や大妻コタカ先生の一人の女性としての一生について学んだことで、それぞれの留学生が様々なことを感じ、大妻コタカ先生が創立した大妻女子大学に留学してよかったと感想を持つようになっている。

## 5. おわりに

2016年度後期に大妻女子大学国際センターに所属し、日本語と日本事情を学んだ10名の韓国・中国の留学生たちは、大妻女子大学学祖大妻コタカ先生の『ごもくめし』の講読を通じて、多くのことを学んだ。来日前に、母国でドラマや映画、漫

画などを通じて構築された日本女性のイメージが先入観となり、『ごもくめし』の内容に対し偏見を持ち、理解がスムーズにいかないこともあった。しかし、コタカ先生が説く「良妻賢母」の意味を正しく理解してからは、自らが望む女性としての生き方と照らし合わせ、留学を終え帰国してからの人生における様々な選択肢についてより深く考えるようになったようである。

さらに留学生たちが持っていた日本女性に対する偏見とかけ離れた生き方をしたコタカ先生については、才能を発揮した日本女性の一人というとならえ方にとどまらず、人生の先輩である一人の女性として憧れや尊敬の念を抱くようになった。また同じように日本語が学べる日本の他大学でなく、明治時代に様々な困難を乗り越えて一人の女性が創立した大妻女子大学に留学したことに非常に好意的で特別な意味を見出していた。

大妻女子大学国際センターの留学生たちにとって、日本の留学先の大学に求めるものは、日本語コースのカリキュラムであったり、日本文化に触れられる機会であったり、条件のよいアルバイトが探しやすい立地だったり、全般的に留学先大学の創立者や歴史、建学の精神についてはまったく注意を払っていなかったようである。しかし今回明らかになったのは、本学国際センターの留学生が自らの留学している大学の歴史や創立者の思いを知ったことで、他大学でなく大妻女子大学に来たことに対して意義を見出すようになったことである。『ごもくめし』を読むまで、自らが留学している大妻女子大学がどのような大学であるかを知らなかった留学生全員であったが、『ごもくめし』を読んだことで、これほどまで大妻女子大学やコタカ先生に対し好意的な姿勢になったことは特筆すべきである。

これまで『ごもくめし』は、主に大妻学院関係者を中心に読まれてきた。しかし本稿で見られるように、韓国・中国の、特に若い女性による『ごもくめし』の受け止め方は、日本での受け止められ方と異なり、日本の歴史や特に女性史、またジェンダーに関する知識を得ることができる優れた教科書のようなものである。また大妻学院の学院史や創立者などについての詳細が紹介されているため、大妻学院の広報ツールとして、特に大妻女子大学への留学生誘致のために、『ごもくめし』を利用するのも有効なのではないか。

## 引用文献

- [1] 陳 延媛『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』勁草書房 2006.  
[2] アジア・ジェンダー文化研究センター 奈良女子大学『ニュースレター』7. 2008.  
[3] 朴宣美『朝鮮女性の知の回遊—植民地文化支配と日本留学』山川出版社 2005.  
[4] 伊藤由希子「下田歌子の「良妻と賢母」(1)」『女性と文化：下田歌子研究所年報』2015, pp128-142.

- [5] 韓韓「中国近代女子教育における日本受容」博士學位論文 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 日本言語文化専攻 2014.  
[6] 濱口 桂一郎『働く女子の運命』文藝春秋 2015.  
[7] 小倉 紀蔵『ハイブリッド化する日韓（真横から見る現代）』エヌティティ出版 2010.

## Abstract

*Gomokumeshi* is an autobiography written by Mrs. Kotaka Otsuma, founder of Otsuma Women's University. The autobiography details the history of the university, as well as its fundamental principle of the education for women, for which it has earned the reputation of raising "good wives and wise mothers". *Gomokumeshi* has been read by Otsuma's junior and senior high school pupils, undergraduate and graduate students, their parents, and staff members. However, there has not yet been any report on how it is accepted by foreigners. This article reports the views of 10 Chinese and Korean exchange students, following their perusal of the book. These exchange students were enrolled in the International Center in the second semester of the academic year 2016. Further, this article shows how the exchange students' negative image towards Japanese women has changed since they started reading *Gomokumeshi*, and how they found special value in studying at Otsuma Women's University. Their bias that Japanese women become pitifully stuck at home after marriage, has lessened, after learning that Kotaka supported the social progress of married women. Additionally, the recognition that Kotaka herself founded Otsuma after she married her husband, made them respect her profoundly, and has assisted in their finding favourable meaning in studying at Otsuma Women's University.

(受付日：2017年10月20日，受理日：2017年11月6日)



伊藤 みちる (いとう みちる)

現職：大妻女子大学国際センター専任講師

英国ウォーリック大学大学院社会学研究科社会調査学専攻修士課程修了。  
専門は旧英領カリブ海地域におけるポストコロニアル社会問題。

タイ王国国立ラジャパット大学ペップリーウィタヤロンコーン校や西インド諸島大学（ジャマイカ）などの日本語コース運営に携わった。現在、大妻女子大学国際センター教育プログラム日本語・日本事情コースの運営を担当する。